HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	博物館における地域連携活動の社会的効果 : 伊丹市昆虫館「鳴く虫と郷町」を対象とした実践事例から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	卓, 彦伶
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14624号
Issue Date	2021-06-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/82282
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yenling_Cho_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：卓　彦伶

主査 教　授　　佐々木亨
審査委員　副査 准教授　　久井貴世
副査 准教授　　山﨑幸治

学位論文題名
博物館における地域連携活動の社会的効果
―伊丹市昆虫館「鳴く虫と郷町」を対象とした実践事例から―

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、博物館における地域連携活動のあり方について検討し、博物館の地域連携活動が地域社会に及ぼす社会的効果とその意義を明らかにすることを目的としている。その調査対象として、伊丹市昆虫館の地域連携活動である「鳴く虫と郷町」を事例とした。

具体的には、兵庫県伊丹市で毎年9月に開催される「鳴く虫と郷町」を対象に、関係者とともに「ロジック・モデル」を構築した。その後、事業関係者へのヒアリング、来場者へのアンケート、地域住民へのwebアンケート調査を通して1788サンプルのデータを収集し、SPSSを使って統計分析を行い、地域連携活動の社会的効果を検証した。その結果、事業目的である「地域の人々に秋のおとずれを楽しんでもらう」「地域の良さを再認識してもらう」「地域の人々の交流をうながす」がどの程度達成されているかが判明した。併せて、地域の人々の「鳴く虫と郷町」に対する認知、伊丹市昆虫館が事業を通して得られた成果も明らかとなった。

本論文の当該研究領域における研究成果は、次の3つである。

1つめは、我が国における博物館が係わる、地域連携活動のこれまでの歴史的な変遷や政策上の変遷を文献資料によって丹念に調査したことである。加えて、実際の連携のあり方を網羅的に調査し、地域連携活動を目的によって「経営資源を確保するための連携」、「地域情報を収集ための市民参加活動」、「教育普及・展示活動を充実するための協力」、「非来館者層への波及効果」の4つに分類した。その上で、博物館に還元される成果および地域社会への波及効果を明らかにした。

2つめは、博物館における地域連携活動の社会的成果を評価するモデルを具体的に示した上で、実際にそれに基づいて成果を検証するための調査を試み、評価結果を出したことである。伊丹市昆虫館の地域連携活動「鳴く虫と郷町」を事例とし、関係者とともにロジック・モデルを構築し、その社会的効果の検証を行った。その上で、ロジック・モデルにおける長期・中期・短期アウトカムの項目ごとに、それを評価するための指標を設定し、事業関係者へのヒアリング、来場者へのアンケート、地域住民へのwebアンケートの3つの調査を用いて1788サンプルのデータを収集し、評価結果を導いた。加えて、この評価プロセスは「参加型評価」の実践として位置づけることができ、博物館におけるこの評価手法の先駆的な事例となる。つまり、博物館の評価手法として、多くの博物館でこれまで「業績測定型評価」が使われてきたが、それに代わる新たな評価手法として、ロジック・モデルおよび参加型評価導入の可能性を示したと言える。

3つめは、博物館は地域連携活動によって、地域社会での博物館の存在意義を増大させ、地域連携活動による成果の検証は、博物館の使命の明確化に寄与すると結論づけたことである。

つまり、博物館は地域社会における役割を示した使命を明文化していることが前提であり、その使命の達成状況を検証する評価活動を通じて、使命は改善されていくというサイクルがあり、その重要性を示したと言える。

・学位授与に関する委員会の所見

申請者は 2018 年 4 月から 2020 年 2 月までの間、1 ヶ月以上に及ぶ 2 回の滞在を含め、計 19 回調査対象地域を訪れ、関係者との人間関係を構築した。口頭試問において、フィールドワークにおけるこの姿勢は高く評価できるとの発言があった。

一方で、本論文の各章において記述されている調査結果や知見が、終章の考察や議論において十分に活用されていない点は否めないとの指摘があった。また、この研究では、伊丹市昆虫館の地域連携活動である「鳴く虫と郷町」を対象に、ロジック・モデルという手法を用いているが、研究目的を達成するために、なぜこの活動を対象にし、なぜこの評価手法を用いたのかについての論理的な説明が不十分であるとの指摘があった。さらに、研究成果の現地へのフィードバックの仕方、または地域連携活動「鳴く虫と郷町」の今後の企画立案に関する具体的な提案があってもよいのではないかとの指摘もあった。しかし、これらの点に関して申請者はすでに認識しており、今後研究が進むことで解決できるものであり、本論文の成果を損なうものではないと判断した。なお、本論文の第 1 章と第 3 章の内容は、査読を経て 2018 年に『博物館学雑誌』44（1）に、第 2 章は 2017 年に文学研究科『研究論集』17 に掲載された。

以上の審査の結果、審査委員会は全員一致して、本論文の著者である卓 彦伶氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。